

第5編 プランニングのすすめ

第1章 計画の重要性

第1節 計画を立てることがなぜ重要か？

「計画を立ててもどうせ実践できないから意味がない」という言葉を耳にします。

しかし、それは間違いです！計画は立てること自体に意味があるのです（もちろん、実践するのがベストです）。

まず、計画を立てようとする時、これから自分が何をやるべきなのかを把握する必要があります。この自分がやるべきことを把握するという過程が何よりも重要なのです。この過程を踏むことで、（司法試験までに）残された時間で一体何ができるのかを自然に考えることができるのです。

これにより、いかに残された時間が少ないのかわかり、あせり、勉強に精を出すことができます。他方で、やるべきことを明確にすることで、何からしたらよいか分からない、本当に間に合うのかといった漠然とした不安を消すこともできるのです。

第2節 計画の立て方

①やるべきことを把握する

夏休みや春休みといった長期休みでは時間がたくさんあると感じるため、やりたいことがたくさん出てくると思います。欲張ってもいいので、それをまず全て紙に書き出してみましょう。短答・論文過去問、基本書、演習書、百選など、人それぞれいろいろあると思います。

次に、書き出したものに優先順位をつけましょう。欲張って全部を長期休みにやることはできません。本書の「ロースクールの過ごし方」を参照しながら自分が今すべきことに沿って、やることを絞り込んでいくのです。

②長期的な計画をまず大雑把に決める

今が3年の夏休みとしましょ。司法試験まであと10カ月という段階です。この時期になれば後期は授業が少ないでしょうし、長期的な計画を立てやすくなります。もっとも10カ月丸々使えるわけではありません。直前の4月・5月は全科目の総復習、1月は期末試験の勉強に追われるでしょうから、計画を立てることができるのは実質的に7カ月です。

勉強の基本は「繰り返し」です。あまり手を広げずにやるべきことを絞って繰り返すことで、知識はどんどんと定着していきます。同じ過去問や演習書を複数回解いても、そのたびに新鮮な発見がありますし、間違える問題は何度やっても間違えることがあります。

1つの基本書・演習書をやる時は出来れば3周は解いてほしいです。ただ、回数が増え

るにつれて回すスピードも上がっていくでしょうから、1周目3カ月→2周目2.5カ月→3周目1.5カ月というようにスケジュールを組むようにするといいでしょう。

1周目が3カ月といっても8科目あるわけですから、あまりゆっくりとはしてられません。**日曜日は調整日**（基本的にスケジュールを空けておいて、遅れた分を取り戻す日）に充てたほうがいいので、1週間で計画を立てることが出来るのは6日間です。ここにやりたいことを割り当てていくのです。ここまで考えていくと、やる事が出来るものはかなり少ないということが分かると思います。

③一日のスケジュールを作る

上記の計画に基づいて、優先順位の高いものを日割りで計算すると一日に出来る分量が分かると思います。これを付属の「1週間の勉強計画」(次ページ参照)に書き込んで、およその計画を立ててみましょう。「この時間帯は毎日百選20個」とか「この演習書は毎週5問ずつやれば3カ月で終わるなあ」など、自分がやるべきことがどれくらいのペースでやればいつ終わるかが明確になってきます。

計画を立てても計画通りに進むことはありません。**必ず遅れ**が出てきますので、調整日である日曜日にやったり、**計画自体を修正していく必要**があります。計画は一度作成したら終わりではなく、自分の進路に応じて臨機応変に変更していきましょう。

次ページ「1週間の勉強計画」の使用例

ページ数や設問の個数等を記入して、ノルマを具体的に設定すること。

タイマーを使用するなどして一日の勉強時間を計測してみると、モチベーション維持にもつながります。そして、一日の最後に実際の勉強時間を記入しましょう！

10/29 (月)	
目標: 10 時間勉強	
6	
7	起床
8	
9	
10	苦手科目の克服
11	会社法リーク P20~50
12	昼食
13	
14	演習書を使用してアウトプット
15	ロースクール演習
16	会社法 [27]~[29]
17	P226~251
18	
19	夕食
20	
21	短答 憲法20問
22	
23	
今日の勉強時間	9 時間 30 分

9時~12時 (3時間)
13時~19時 (6時間)
20時~22時 (2時間)
の合計11時間分の勉強時間を確保していますが、トイレ休憩等があるため、1時間分ひいて、目標は10時間に設定しています。

日曜日はあらかじめ調整日に設定しておいて、月曜から土曜までにこなさきれなかったノルマをこなしましょう。

第2章 ロースクールの過ごし方

以下に書いた勉強計画は、ロースクール生活を有意義に過ごすための1つの指標を示したものである。入学時の能力により、どの時期に何をすべきかは異なるであろうから、あくまでも1つのモデルケースとして参考にしてほしい。

そして、以下には執筆者の様々な思いが込められているので、自分の勉強に行き詰った時や、勉強方法に悩んだときには、是非自分が今いる時期に該当する箇所を参考にしてより一層勉強に励んで欲しい。

●ロースクール入学前～ロースクール修了後までの勉強計画の概観

未修 1年目	入学前	①薄い入門書の通読 ②関大の事前ガイダンスへの参加 ③裁判の傍聴
	前期	①予習・復習をこなす体力をつける ②無事に単位を取得する ③六法を使いこなす ④情報を一元化したサブノート作り
	夏休み	後期の講義の予習
	後期	①短答対策 ②サブノート作り
	春休み	①短答過去問を時間を測って解く ②2年次の年間計画を作成

未修 2年目 既修 1年目	入学前 (既修者)	①基本書等で知識の確認 ① 裁判傍聴
	前期	①講義の予習復習を司法試験で使える形で行う ② 基本知識の習得
	夏休み	短答過去問を時間を測って解く
	後期	講義の予習・復習をペースメーカーにして基本7法の理解を深める
	春休み	①司法試験の論文過去問を解く ②選択科目の勉強を始める

未修 3年目 既修 2年目	前期	①講義の予習・復習をペースメーカーにして基本7法の理解を深める ②論文過去問分析の継続 ③論文過去問の答案練習（2週で1通）
	夏休み	①短答苦手→短答の勉強 ②短答得意→短答と並行しつつ，論文の演習書を解く ③選択科目を一定レベルまで引き上げる ④論文過去問の答案練習（週1通）
	後期	①短答苦手→短答の勉強 ②短答得意→夏休みの演習書を繰り返す ③過去問分析をしていない人はこの時期に必ずする ④論文過去問の答案練習（週1通。期末試験後は週2通）
	司法試験 直前期	①全科目の重要論点や判例を総復習 ②全国模試の受講

修了後	短答不合格者	①5月中に再現答案を作成（遅くとも6月中） ②9月までに短答合格レベルまで引き上げる
	論文不合格者	①5月中に再現答案を作成（遅くとも6月中） ②論文の敗因分析
	受け控え	試験問題が公表されたらすぐに時間を測って解く

次ページからは、合格者の経験を踏まえて、より詳細にそれぞれの時期における過ごし方の指標を示していく。

第1節 未修1年目

この第1節の筆者は、1年目択一不合格、2年目最終合格（800位）の未修コース出身者である。自己の経験や反省を踏まえ、自分が考える理想の未修1年目の過ごし方について記載した。

しかし、この過ごし方もあくまで参考である。司法試験に合格するためには、試験委員が求める能力と、現在の自分の能力の差を埋めることが必要であるが、各々の能力に応じて勉強方法も色々である。この記述を一つのきっかけとして、自己の勉強スタイルを確立していってもらえたら幸いである。

入学前

1 法律の勉強をしよう

法律の入門書等を読むべきであると考え。入学前に一通り読んでおかないと、ローの授業についていけない。その結果、授業についていくのが精一杯、もしくは消化不良となり、司法試験の過去問対策に手を付けるのが遅れ、合格が遅れる。

純粹未修者には、伊藤塾の試験対策講座がおすすめ。全く法律的な知識がなくても、スラスラ読めるし、分かりやすい（ただし、授業には持っていけないこと）。

入学までに、目次を見て、どこに何が書いてあったか、大まかにどのような制度があったか、などがすぐに思い出せるくらいはなっておきたい。

なお、関大は入学予定者向けの事前指導も行われており、これを利用するのも良い。

2 予備校入門講座の勧め

金銭的な余裕があるのならば、予備校の入門講座を受けておくことを強く勧める（修習に行って初めて知ったが、合格率の良いローの現役（上位）合格者は、そのほとんどが予備校の入門講座や論文答練を受講していた）。私も、ロー入学前に一通りの入門講座を受講していた一人である。

関大の未修者は、妙に予備校嫌いが多い印象がある。しかし、司法試験を確実に合格するという観点からすれば、予備校の入門講座を受けて、入学後の勉強の方向性を間違わないようにすること（関大の未修者の合格率を参照）がとても重要であると考え。

前期

1 授業についていこう

まず、ローに入学したら、予習復習の量にびっくりすると思う。1科目の予習をするのに3時間以上かかることもあるだろう。めげずになんとか食らいついていこう。単位を落とすことは、2年次の負担が増大し、結果として司法試験の勉強が遅れることにつながる。単位を落とすことだけはないようにしよう。

2 六法をこまめにひこう

すべては条文から始まる。未修者は、六法をこまめにひく癖があまりついていないように思う。どの条文のどの文言が問題となっているのか、その文言をどのよう解釈し、どのよう
事実にあてはめているのかを意識して、判例も参考にしつつ、六法をこまめにひいて勉強す

るようにしよう。

3 特別演習を受講しよう

合格者の授業をタダで受講できるのであるから、受けない手はない。司法試験に合格するためには、試験委員が求める能力と現在の自分の能力の差を埋めることが必要である。そのためには、合格者の話を聴くのが一番手っ取り早い。未修者の中には、ある程度の知識を習得してから、受講しようとする人がいる。しかし、司法試験に合格するためにはどの程度の知識を習得すべきか、日々の勉強の方向性を見定めるためにも、早い段階で特別演習を受講することを勧める。また、自分の答案を人に見られたくない、恥ずかしいという変なプライドから、特別演習を避ける人がいる。しかし、我々の目標は、司法試験に合格することの**はず**。今現在カス答案しか書けなくても、司法試験当日に合格答案が書けるようになっていたら良いのである。変なプライドはどうか捨ててほしい。

4 択一を解こう

この時期から、択一の過去問を解くべきである。わが校の未修者の現役択一合格率は低い。現に、筆者の私も1年目択一不合格という情けない結果に終わった。原因は択一の勉強開始時期が非常に遅れたことにあると思う。だから、「過去問を解くのはまだ早い」なんて思わず、なんとかして時間を確保して、択一の勉強をしてほしい。

そして、択一を解く際は、ただ漫然と解くのではなく、その肢をきっかけとして条文の文言や、関連判例、その他周辺知識をさらい、その肢を「真に理解する」という勉強をしてほしい。この勉強は大変時間がかかる。一日数問しかこなせないこともあるだろう。しかし、それでいいのである。勉強の目的は、あくまで試験当日、初見である択一問題の正解の肢を選ぶことができるようになること。ただ漫然と過去問を1問1問解き、数をこなしても、到底択一合格はできない。自分が、試験当日、初見の問題を正解できるようになるためには、どう勉強すればよいかを常に意識してほしい。

5 周りに惑わされないようにしよう

授業中の「〇〇先生の基本書にはこう書いてある」などという発言に惑わされてはいけない。また、授業中やたらと発言する生徒が基本書を大量に収集していたとしても、惑わされてはいけない。それらに引きずられて学問的研鑽に走ると、司法試験合格のルートから外れていくことになる。

夏休み

1 司法試験の論文過去問を見てみよう

試験委員が求める能力と、現在の自分の能力の差を埋めるためには、まず試験委員が求める能力を把握することが重要である。試験委員が求める能力を把握するためには、過去問・出題趣旨・採点実感を読むことが近道である。この段階で、答案を書く必要はないと考えるが、過去問・出題趣旨・採点実感を読んで、審査委員がどんな能力を求めているか、ざっくりでもいいので把握するよう努めよう。

2 学問的研鑽をしない

法律の勉強は面白いし奥が深い。夏休みということで、時間的余裕ができたと感じて、細かな学説の研究をしたくなったり、1科目につき基本書を何冊も通読したくなったりするかもしれない。しかし、司法試験は実務家登用試験である。実務は判例通説で動いている。そのことを意識して、知的好奇心をどうか抑えてほしい。我々に与えられた時間は、とても少ない。判例通説を身につけるだけでも、大変である。学問的研鑽は合格後にすることとして、判例通説の知識の習得に励むようにしよう。

3 択一の勉強を継続しよう

前期に引き続き択一の勉強を継続しよう。特に夏休みは怠惰になりがち。択一にあてる時間を決めて、毎日択一の勉強をしてほしい。前述したが、その勉強の際には、ただ漫然と解くのではなく、その肢をきっかけとして条文の文言や、関連判例、その他周辺知識をさらい、その肢を「真に理解する」という勉強をするように（しつこいようだが、できていない人が多い。私もその一人だった）。

後期

1 授業を「こなす」

この頃になると、だいぶペースもつかめて授業に追われることはなくなると思う。また、前期、夏休みを通して、択一・論文で要求されている能力を、ざっくりとでも把握できている状況であると思う。授業で習得した知識を、司法試験を意識した形で教科書に書き込むなり、一元化ノートに挟みこむなりしていこう。ロースクールの授業と司法試験の勉強をまったく切り離してしまうのはもったいない（私は完全に切り離してしまっていた。後悔している。）。司法試験合格を常に意識して、授業を利用しよう。特に、制度の原理原則を学ぶのは、ロースクールの授業が一番適切と考える。

2 合格者報告会に参加しよう

10月頃になると、わが校の合格者報告会が開催される。多数の合格者の話を聴くことのできる格好の機会である。ここで注意してほしいのは、合格者は勉強方法について、色々なことを話すということである。司法試験に合格するためには、試験委員が求める能力と、現在の自分の能力の差を埋めることが必要であるが、各々の能力に応じて勉強方法も色々である。したがって、1人の合格者の勉強方法が自分に合っているとは限らない。そのことは十分注意してほしい。しかし、合格者全員が共通して述べていることが必ずある。その最大公約数的な勉強方法や、思考は吸収するようにしてほしい。

春休み

1 択一過去問を時間を計って解いてみよう

当然であるが、試験は時間との勝負である。特に択一試験の試験時間はかなりシビアである。そのシビアさを、身をもって体験しておくことによって、自己の知識の定着の甘さや、時間管理の甘さを思い知ることができる。また、時間内に試験問題を解くことができるためには、どうすればよいかを考えるきっかけとなる。この時期までには必ず時間を計って解くようにしよう。

2 司法試験過去問の再現答案を読んで相場観をつかもう

試験委員が求める能力と、現在の自分の能力の差を埋めることが出来れば、司法試験に合格できる。しかし、試験委員の求める能力を100%身に着けなくとも、試験には合格できる（そもそも試験委員の求める能力を100%身に着けることは不可能に近い）。ただ、試験委員が、「これだけは書いてほしい」と考えている水準が必ずある。それを把握するために、1000番から1500番の答案と、不合格答案を比べて、何が合否を分けたのか、研究することが重要である。その上で、「これだけ書けていれば1000番くらいで合格できる」という相場観を身に着けてほしい。相場観を身に着けたら、現在の自分の能力でこのような答案が書けるのかを検討し、足りない能力を補うような勉強をしよう。

第2節 未修2年目・既修1年目

既修入学者の入学前の過ごし方

法科大学院入試は11月頃には終わると思います。その後から法科大学院入学までは、色々忙しい時期だとは思いますが、合間を見つけて法科大学院進学後に向けた勉強をおきましょう。

まず、基本知識の確認をおきましょう。既修者コースは法律知識があることを前提にしていますので、いきなり演習科目から始まります。また、講義がある科目についてもロースクールでの授業のコマ数は多くないため、万遍なく触れることはできません。そのため、入学前から一定の法律知識を備えておく必要があります。基本知識の確認としては、基本書の通読等がよいと思います。多くの合格者は、司法試験直前期に復習しやすいように情報を一元化するツールを持っていますので、情報一元化という視点を持って基本書等を絞っていきましょう。

また、できれば司法試験の短答・論文の過去問を1年分でも見ておくのが良いと思います。司法試験の問題を知らなければ勉強対策が立てられないからです。司法試験の問題は難しいので、入学前に見てもよく分からないかもしれませんが、よく分からないということも発見の一つです。2年後にはその問題に対して一定の解答ができなければならないのですから、よく分からないと感じた人は精一杯勉強するようにしてください。

その他には、裁判傍聴や法律家の書いた本を読む等して、モチベーションを高めておくというのも良いかもしれません。法律家になりたいという気持ちが強くあれば、落ち込んだときでも頑張れると思います。

前期

授業の数はそれほど多くありませんが、予習復習すべきことが多いため、とても忙しいように感じると思います。あまりの忙しさに落ち込むこともあるかもしれませんが、徐々に慣れていきますので、あきらめずに頑張りましょう。

まず、授業の予習復習を大切にしましょう。授業でやったことをしっかり身に付け、基本知識を定着させることが大切です。授業について批判をする人もいますが、授業を上手く活かせるか活かせないかは個々人の問題です。司法試験に合格している人の多くは授業を上手く活かしているという印象です。法科大学院の生活は、授業が中心となるので、授業を上手く活かすことが合格に結び付くと思います。なお、予習と復習のどちらに重きを置くかは好みの問題だと思うので、自分に合う方を選んでください。

また、授業を大切にしつつも司法試験に向けた勉強もしっかりしておきましょう。具体的には過去問の検討等です。私は、この時期は主に短答の勉強をしていました。授業にあわせて該当範囲の基本書を読み、短答過去問を解く等すれば授業の予習復習と司法試験対策を同時にすることができます。効率のよい方法で試験対策も行っていきましょう。

GWは、法科大学院で最初の長期休暇ですので、論文の過去問を見る等して有意義に過ごしてください。私は、GWに過去問を見たおかげでその後の勉強計画を立てることができました。また、特別演習にも積極的に参加して論述の練習をするようにしましょう。

この時期に大切なことは、基本知識をしっかり定着させることです。司法試験の出題趣旨や採点実感等を見ても基本知識が強く要求されており、応用的な問題も基本知識から考えることが求められています。細かい学説や学術的な理論は求められていませんし、それらを追い求めてもきりがないので、むやみに学術的な勉強に走ることなく、基本をしっかりさせることを心掛けましょう。

夏休み

定期試験が終わり、忘れてしまいがちですが、気を引き締めてしっかり頑張りましょう。夏を制する者が司法試験を制すると言いますが、法科大学院の2・3年という短い期間では自分の勉強時間をとれる長期休暇が非常に重要になってきます。また、夏休みに勉強を頑張れば、後期を安心して迎えられるます。

基本的には司法試験対策を行いましょ。司法試験の過去問を解くことでゴールが明確になります。まず、短答対策をする必要があります。関西大学法科大学院では、毎年、修了生TAによる短答体感模試なるものが開催されます。本番の時間で短答を解く貴重な機会ですので積極的に参加しましょう。多くの方はここで自分の実力に衝撃を受けるのではないのでしょうか。私もこの時期に短答足切り点にすら達しておらず落ち込んだのを覚えています。ただ自分の実力を知ることができ、危機感を持てたことは良かったと思います。現実から逃げても意味はありませんので、時間を計って短答過去問を解く機会を設けるようにしてください。そして、過去問を解いた後はしっかり復習し、短答知識を身につけるようにしてください。また、私は、前期の授業でやらなかった範囲の基本書を読み、短答の過去問を解く等していました。これは試験対策になるだけでなく、後期の授業にも活きてくるものでした。

できれば論文の過去問もやりましょ。新司法試験となってから何年も経つため過去問は蓄積されています。多くの過去問を解くことによって司法試験の傾向を知ることができ、それにより対策を考えることができるので、できるだけ多くの過去問を見るのが良いと思います。もっとも、直近の過去問の方が参考になることが多いので、新しい問題からやっていくことをお勧めします。一人では過去問を解く気が起きないという人は、ゼミを組む等して強制的に過去問を解く機会を作るのも良いかもしれません。

また、近年は、AAの先生方による夏期特別演習等も多く開催されています。自分に合う良い講座を見つけて、積極的に参加し、勉強をする機会にしましょう。

後期

再び予習復習に追われる忙しい日々が訪れます。前期をうまく過ごせなかったという人

は、切り替えて後期からは効率よく過ごすようにしましょう。

基本的には前期と同様、授業が中心になります。そのため、授業をしっかりこなすことが求められます。授業の予習復習をペースメーカーにして基本知識の定着を図りましょう。演習等では課題を試験問題に見立てて、答案に書くとするばどのように書くかということ意識していれば、インプットをしながらアウトプットの練習をすることができます。授業を大切に、そこからしっかり学んでいきましょう。また、授業の予習復習だけで終わることの無いよう、できる限り自分の時間を作るようにして、司法試験の対策もするようにしましょう。

春休み

春の暖かな陽気に誘われて遊びに行きたくなるかもしれませんが、ぐっところえて勉強するようにしましょう。勉強の内容としては自分に足りないものをしましょう。

まだこの時期は、多くの方が短答対策も十分ではないと思います。基本書を読み、過去問を何度も解いて基本知識を身につけていきましょう。私は、この時期にTKKの短答模試を受けました。自分の実力を知ることができたので良かったと思います。模試や過去問等を解いてみて、すでに短答の実力十分なら安心して論文対策をしていきましょう。

短答合格間違いのない人も短答不安な人も論文対策を始めましょう。優先すべきは論文試験の過去問です。この時期は多くの方が論文の過去問検討も不十分だと思うので、過去問をしっかりやっていきましょう。過去問を解く際は、ただ解いて終わりにするだけでなく、出題趣旨や採点実感、合格者答案等を見て合格に必要な力を知るようにしてください。また、自分の書いた答案等も自分でしっかり検討し、自分に足りないものを明らかにしましょう。余裕がある人は演習書にも取り組みましょう。多くの方は演習量が不足していると思います。時間を見つけて事例問題を解く機会を作り、アウトプットの力を身につけていきましょう。基本書や判例集を読む際にも、漫然と読むことなく、アウトプットを意識することが重要です。たとえば、基本書のケースや小見出し、判例の事案を問題に見立てて、自分の頭で考えるようにすれば、基本書や判例集を読みながら、アウトプットの練習をすることができます。効率よく勉強するために、アウトプットを意識したインプットを心がけましょう。

また、選択科目を決めておくのも良いと思います。この時期はまだ選択科目を決めていない人もいます。私も既修1年目は選択科目を履修しておらず、この時期になって選択科目を決めました。選択科目の深い勉強は授業が始まってからでもよいと思いますが、薄めの入門書等でその科目の概要を知っておけば授業を受けて得ることは多くなるので、入門書等を読んでおくことはお勧めです。ちなみに私は労働法を選択しましたが入門書としてはプレップ労働法がお勧めです。

第3節 未修3年目・既修2年目

前期

この時期も授業の予習復習に追われることになると思います。授業のコマ数は、未修2年目・既修1年目より多くなるので、さらに忙しくなるかもしれません。ただ、必修科目は減り、司法試験科目以外の授業が多くなるので、授業間でもメリハリをつけることが必要になると思います。法科大学院生の目標は、司法試験に合格することですので、司法試験的に見て必須でない科目の授業の予習復習は最低限のものにするなどして、自分の時間を確保していくことが必要かと思います。与えられたことだけに追われることなく、自分でしっかり考えて司法試験合格に必要なことをしていきましょう。

単位を落とすのが怖いかもかもしれませんが、司法試験科目の発展科目等は履修するのが良いと思います。授業でしっかり学べば正確な法律知識が身についていくと思います。

また、予習復習の合間や休日等を利用して、過去問検討・演習書等の司法試験対策もしっかりしていきましょう。特別演習に参加する等して答案を書く機会も作り、論述の練習もやるべきです。司法試験まで1年ほどになり、残された時間は多くありません。怠けることなく一日一日を大切にしましょう。

夏休み

司法試験までの間で最後の夏休みですので無駄にしないように過ごしましょう。この夏休みにやるべきことは、苦手科目の克服等、自分に足りていないことをすることです。

短答がまだ合格ラインに届いていない人は、特に危機感を強く持って勉強するようにしましょう。短答の勉強としては、引き続き過去問をしっかりやることで良いと思います。過去問は何度もやったという人がいるかもしれませんが、過去問を本当に身につくまでしていれば短答合格ラインを大きく上回ることができると思います。単に正誤を確認するだけでなく、正誤の理由をしっかり考え、論文で聞かれたらどう書くか等を考えて勉強をしていけばより伸びていくと思います。司法試験では論文の配点割合が大きく、短答では細かい知識も問われるため、司法試験直前期に短答の勉強ばかりをするのは、精神的にも、合格という観点からもよろしくありません。この時期に合格点は取れるようにしておきましょう。

また、論文の勉強もしっかりしていきましょう。司法試験では、論文試験の配点割合が大きいため、司法試験に合格するポイントは論文試験にあります。まず、過去問をしっかりこなしましょう。過去問をすることで、司法試験の傾向をつかみ対策を立てやすくなります。また、司法試験の問題には解き方があるように思います。そのため、過去問をしっかりこなし、司法試験の問題に慣れるようにしましょう。過去問は特別演習で解いたという人もいますが、過去問は何度解いても良いと思います。出題趣旨・採点実感・合格答案等でしっかり検討すればその度に新しい発見があるからです。また、演習書

もやるべきだと思います。基本書・判例集等を読む際にも論文で書くとしたらどう書くかということ意識して、アウトプットを意識したインプットをしていきましょう。論文の勉強量が不足している人は多いと思うので、夏休みという時間のある時にできる限り勉強し、演習量を確保しましょう。

夏休み等自分の時間が取れるときには自分の好きな科目ばかりしてしまいがちです。もちろん、得意科目を伸ばすというのも良いことですが、司法試験は穴がなければ合格できる試験です。論文試験では50%取れば十分合格することができるのです。そのため、不得意科目を作らないよう万遍なく勉強しましょう。

後期

法科大学院での生活も終盤に差し掛かり、だいぶ余裕が出てくると思います。授業をしっかりこなしつつ、司法試験に向けた勉強もしていきましょう。

短答が不安な人は、短答の勉強を続けましょう。短答試験で不合格となれば、論文が採点されず、次の年に向けた対策を立てにくいので、絶対に短答は合格できるというレベルにまで持っていきましょう。

論文の勉強は、引き続き過去問や演習書等をこなしていきましょう。司法試験では正確な法律知識が求められるため、何度も同じ基本書・演習書を繰り返し、当該基本書・演習書の知識を定着させるのが良いと思います。むやみに多くの基本書・演習書に手を出すことはやめましょう。参考程度に他の教科書を見たり、不得意科目をなくすために新たな基本書を読むのは良いかもしれませんが、手を広げすぎて発展的な知識を追い求め、基本がおろそかになれば合格は難しくなります。どの程度、他の基本書・演習書をするかは各人の判断に任せますが、基本を大切にすることには心がけてください。

また、答案を書く練習もしましょう。授業で答案を書く機会があれば積極的に利用しましょう。また、特別演習にも参加して、答案を書く機会を設けましょう。司法試験と同じ時間で自分はどのくらい書けるのかということ把握し、力が足りていないと感じた人は、その後もしっかり答案を書く練習をしましょう。予備校の答案練習会を活用するのも良いと思います。私は、辰巳法律研究所のスタンダード論文答練に参加していました。予備校の答案練習会は質が悪いという人もいますが、基本的な論点を聞いてくれることが多いので勉強になると思います。注意すべきことは、答案を書くことは重要ですが、ただ書いていけば合格に必要な知識・能力・答案の型が身に付くというものではありません。答案を書いて人に添削してもらった場合、指摘を真摯に受けとめ改善していくように努めましょう。また、答案を書く度に課題を設けたり、答案を読み返して自己反省する等して、答案を一通書くごとに成長できるように工夫しましょう。しっかり、自分で考えて、反省することが必要です。

直前期

この時期は全科目の復習を中心にしていきましょう。司法試験の試験時間は短いため、基本知識がぱっと出てくることが重要になります。今までやってきたことを総復習して、基本知識をしっかり固めるようにしましょう。本番にピークを持ってくるということを心がけてください。直前期に新しいことをやっても消化することは難しいため、あまり手を広げないようにしましょう。

過去問もやっておくのも良いと思います。司法試験には解き方・傾向があるので、過去問を解き、カンを忘れないようにしておきましょう。過去問で司法試験の解き方を身に付けておけば、本番で新しい問題を見ても焦らずに解くことができると思います。

また、答案を書く機会を作っておくのも良いと思います。直前期に書くことを怠ると本番で筆がとまると聞いたことがあります。そんなことにならないよう答案を書く機会も作り、腕が鈍らないようにしておきましょう。

普段から本番を意識しておくのも良いと思います。夜型の人には朝型に切り替えたり、普段より体調管理に気を配ったりする必要があります。多くの人には本番で緊張するので対処法を考えておくというのも良いと思います。本番で凡ミスをしないようにするためにはどうすればよいか、対処法を考えておきましょう。また、必須ではありませんが予備校主催の全国模試は、本番と同じ環境・時間帯で行われることが多いので、本番慣れするために受けるのも良いと思います。

直前に出る重要判例解説や予備校の出すやま当て記事に目を通すかは人それぞれだと思います。私はこれらはやりませんでした。司法試験では基本知識から考えて論証するというのが求められており、最新判例等を知っていることが求められているのではないので、基本知識を固めるために基本書等を読むことを重視したからです。逆に、基本はもう十分だから穴をなくすという意味で重判等を読むというのも有りだと思います。各人の勉強の進み具合を見て判断してください。重要なのはまず基本を固めるということです。

この時期は不安になることも多いと思います。しかし、司法試験は、運によるところは少なく、自分の実力が如実に表れる試験です。これまで精一杯努力してきた人は合格できる試験です。自信を持って試験に臨んでください。

第4節 修了後

修了後については置かれる状況により過ごし方が変わるだろう。以下は2パターン（短答不合格者・論文不合格者）に分けて説明する。

短答不合格者

- 1 短答の結果が発表されるのは6月初旬である。この時点で足切となった者はおそらく気持ちが沈み、9月の最終発表まで再度挑戦に向けてのやる気がいま一つ湧かず、ダラダラと無駄な時間を過ごしてしまうことが考えられる。

しかし、論文で不合格になった場合も、択一で不合格になった場合も、来年の合格を目指すことに変わりはない。「論文不合格者は9月の発表まで、本腰を入れて勉強に取り掛かれない者が多い。自分は早めに結果が分かり、すぐに勉強再開ができるのだから良かった」というくらいの気持ちを持つことが大切である。

- 2 しかし、択一不合格になった者は論文不合格者より不利なこともある。もっとも大きい不利益は、論文の採点結果が分からないことである。これにより、自分の論文作成の感覚と採点委員との距離がつかみにくい。

そこで、再現答案を作成し、弁護士や修習生TA等に添削してもらう必要がある。なるべく多くの人に添削を依頼することをすすめる。合格者は採点委員とは違うのだから、人によって、指摘するポイントが違ってくこともあるからだ。詳しくは論文不合格の項目で述べる。

- 3 短答不合格者がまず取り組むべきことは、なんといっても短答の勉強である。

短答の勉強法としては、多数ある。私自身、短答が苦手かつ嫌いだったため、苦手かつ嫌いだという方の参考になればと以下の方法を掲載する。

(1) 肢別本をまわす

まず、辰巳法律研究所が出版している**肢別本を解く**ことである。私は、肢別本を解く時間は、休憩時間的な感覚で行っていた。肢別本を解くときは休めるという怠けた考えのもと、机以外のところで、休みながらクイズを解く様な感じで行っていた。

しかし、そこで**間違えた問題、分からなかった問題をチェックしておき、勉強モードで条文、基本書等を調べ、ノートにまとめる**という方法をとった。

勉強モードでまとめを作ることはなるべく避けたかったため、1回間違えた問題は、もう間違えないという気持ちで、解いていた。

そこで作ったまとめノートは、答練、模試、**本番の前に見る**という形で使えるため、利用価値が高い。

肢別本については、3回以上はまわしたと思う。どんどんチェックする箇所が減っていき、勉強モードでノートにまとめる時間が減ることに喜びを覚えるという感じで、楽しみながら行うことで、**択一嫌いを克服**していった。

短答が嫌いという感覚がなくなってくると、肢別本を解きながら、この条文の趣旨は何だったかな、この定義は覚えるやつだなという感じで、論文の勉強も意識しながら行うと

効率がよいと思う。

(2) 過去問を解く

短答の合格において、様々な方法があると述べたが、最も多くの合格者が行っていることは、やはり**過去問を解く**ことであるといえる。

時間を計って過去問を解くということは最もやるべきことといえる。

私は、時間がいつも足りなくて、最後まで解けないことが頻繁にあった。分からない問題に時間をかけすぎていたためである。そこで、分からない問題に出くわしたら、飛ばして解く、または、直感で答えて次に行くという方法を徹底して行った。そして、解く時間に負荷をかけた。また、短答が得意な友達が短答を解く時に一緒に解いた。

(3) 基本書を読む

私自身、基本的な知識が足りないと感じたため、空いた時間に基本書を読んだ。基本書を読むことは、もちろん論文に向けての対策でもある。

9月の論文合格発表後においては、問題演習や答練等、実践的な勉強を行うため、基本書を読む時間は9月までしかないと考えていたからである。

4 以上が、私自身行った勉強法であり、この方法による本番での得点率は7割程度であったため、決して、短答で得点を稼げたという得点ではない。

したがって、短答が嫌いかつ苦手であり、7割程度の得点率を狙っている方に前記の方法を参考にしてもらえればと思う。

短答不合格者は、9月までは短答の勉強に比重を置き、後半の論文の勉強に集中できる態勢を整えるように心がけてほしい。

論文不合格者

1 論文の合格発表は9月の初旬にある。不合格となった場合は、落ち込んで、しばらく勉強が手に付かないという状態に陥るだろう。

しかし、不合格になった9月から年が明けるまでの体感速度は非常に早く、あっという間に、全国模試がやってくる。

そこで、気持ちを奮い立たせ、以下の方法を参考に、一日でも早く勉強を始めるように心がけてほしい。

2 (1) 再現答案の作成・その添削依頼

まず、再現答案を作成することをすすめる(再現答案を作れなかった場合は、改めて解いた過去問でもよい)。

その理由としては、自己の作成した答案に対して、採点委員が何点付けたかを、つまり自己の答案作成能力・感覚と採点委員との距離を把握するためである。

この距離を把握し、合格答案を書くためには、何が足りず、どこを治すべきかという自己分析を行う必要がある。

そして、自己分析を行うにおいては、合格者に添削を依頼することも必要となる。

合格者は、この答案にだいたい何点くらいつくかということが、感覚的に分かる者が多い。自分の書いた答案を客観的に分析してもらい、癖や欠点を指摘してもらうことが重要であるといえる。

もっとも、合格者は一定レベルの答案が書けるというだけであり、採点委員と同じ感覚を持っているとは限らないので、自分の好みで指摘する箇所もある。そこで、多くの合格者に添削を依頼し、より多くの意見を集めることをすすめる。

多くの人が指摘する箇所は、修正した方がいい箇所であるという感じで、修正箇所を見極め、自分に足りないことは何かを分析していくことがよいといえる。

(2) 自己分析・勉強計画

自己分析を行うと、合格に向けて自分に足りないことが把握できる。

前述した、添削に加え、**出題趣旨・採点実感**をしっかりと読み、自分に何が足りないかを分析してほしい。

そして、全国模試(3月)までに、合格点に達するためには、どのように勉強をすすめればよいかの計画表を作成することが重要である。

ここで、私が個人的に行った自己分析と勉強計画をあげる。

(3) 自己分析の具体例

- ① 得意な箇所と不得意な箇所があり、問題によって得点にバラつきが生じる。
- ② 書くべき程度が把握できず(この論点ではどの程度論じる必要があり、ここはさらっとまとめるべきか)、配点の高いところで点を稼げず得点のがびない、また、点のないところで書きすぎ時間切れで途中答案になる。
- ③ 受験生が書く平均的な答案のレベルが分からない。

以上の自己分析の結果、以下の計画をたて、実行した。

(4) 勉強計画の具体例

ア 以下計画とその実行により、本番では5割程度の得点率となった。決して高得点ではないが、まもれる答案が書けるようになるものと理解してほしい。

イ ①に対して

予備校等でお出されている論証、また問題集(問題集に関しては、予備校物は使用していない)をまわした。

論証は何回もまわし、問題集に関しては、少なくとも2回以上はまわした。

ウ ②に対して

出題趣旨・採点実感をファイルにして、それを読み込んだ。

それらは、採点委員の意見の集約であるので、司法試験において、何が求められているかを理解することができる。

エ ②、③に対して

(ア) 過去問のゼミ

週に一回、過去問を4～6人で解き、それをみんなが共有して、一人ひとり答案添削を

行うというゼミである。過去問は初見ではないため、答案作成時間に負荷をかけ、1時間40分とした。

このゼミのメリットとしては、自分の答案の悪いところを指摘してもらえるということはもちろんだが、受験生が書く平均的な答案のレベルが把握できること、また、人のミスに気付くことにより、点のつく答案、そうでない答案を把握できる能力が身に付くことである。

厳しいことをいうが、合格点に満たない答案は、欠点や癖があるし、論理が矛盾しているもの、点にならないことを書いているもの等、何らかのミスがある。

他人の答案を分析することによって、自分の答案を客観的に見ることができ、「変なこだわりできれいに書こうとしていたが、点のないところを書いていたんだな。たしかに、このような書き方だと読みにくいな。このように書いた方が点はつくんだな。」等、改めて、自分の欠点に気付かされる。

(イ) 予備校の答練

答練を受け、配点表を分析した。配点が高いところ、低いところをしっかりと把握し、配点バランスの感覚を身に付けた。

また、同じ受験生が書いた平均的な答案を見せてもらい、受験生の平均を分析した。

そして、①にも関係するが、どのような問題がでて、5割の得点率は切らないように心がけた。

3. おわりに

私は試験を乗り越えることに、長い年月がかかった。終わってみて思うことは、司法試験は、たしかに法律の理解度を示すものであることは否定できないが、理解できていなかったとしても、テクニックで乗り切れる面があるといえることである。

合格できなかった年は、自分が正しいと思うことを自分のこだわりのもと、自分が思うように書いていた。

しかし、前述した対策により、みんなが書くところは落とさないこと、点がつく箇所は点をできるだけ拾うことに徹底した。

試験である限り、答案用紙に現れた文章で点をつけるしかない。どれだけ法律を理解していたとしても、用紙にそれが表せないと点が付けられないのである。また、逆を言えば、法律を理解していないとしても、得点になることを書いていたとしたら、点がつくのである。

試験に失敗した者の多くは、同じようなミスをしているケースが多いと感じる。

私の経験が、少しでも役立つことを願い、関大のみなさんのご検討を心よりお祈りする。